九州産業大学国際文化学部紀要　第14号 17—28（1999）

古代ギリシア・ローマ人のインド理解〔Ⅰ〕

二　木　敏　篤

（1999年6月1日受理）

1．はじめに

古代におけるインドとヨーロッパとの交流の歴史を理解する方法の一つとして両地域の人びとにより残された諸記録を調べることがまずあげられる。インド側ではBC4世紀中頃からペルシア（Persia）のアケメネス（Achaemenes）の勢力がインダス河流域に伸び，そのルートを利用してギリシアなどの商人はインド地方に往来した。ギリシアの貨幣が西北インドにもたらされているのもその証拠と言えよう。今も南インドの海岸部などでローマの貨幣が出土するというのも交流の歴史を示すものと言える。しかし，インド側に残るギリシア・ローマに関する文献資料は少ない。一方，それと同様に資料の乏しさから古代のギリシア人やローマ人がインド像をどのように描いていたのかについても不明な点が多い。それは遠隔地であるがために両者の交流が妨げられたことによる点が大きかったと推察できるであろう。ここでは，僅かに残された諸記録をもとに多少でも古代ギリシア・ローマ人のインドに関する知識がどのようであったかを明らかにしたい。

そのことはインド側に極めて歴史史料が貧弱であり，それを補うこともこの研究の意義の一つである。

2．基本的資料について

さて，そのはじめとして，BC304年頃，シリア（Siria）王セレウコス（Seleukos）の使節としてインドのマウリア（Maurya）朝チャンドラグプタ（Chandragupta）王のもとへ派遣されたギリシア人メガステネス（Megasthenes）の名があげられる。彼は（ＢＣ317年から312年まで）の５年間にわたってインドに滞在し，その帰国後に自己の体験と現地の人びとからの聴き取りをもとに『インド誌（Ta Indica)』を著わした。今日，この作品は失なわれて存在しないが，古代の著述家たちにより引用されたその断片を集めることによってかなりの部分を知ることができる。ただ，人から聞き

取ったと思われる内容のなかには荒唐無稽なものが少なくなく，そのためにその内容については信用できぬとさえ言われたが，彼の体験からの記述は真実を記したと思われるところも多く，それだけにこの書物は古代インド研究の基本資料といえる。

古代ヨーロッパの人々に東方世界に関する豊富な資料をもたらしたのはマケドニアのアレキサンドロス(Alexandoros)大王の東方遠征である。BC334年には大軍を率いて小アジアに進入し，BC330年にペルシア(Persia)帝国を滅亡させる。更に，BC327年にはついにインダス (Indus) 川上流の現パンジャブ (Punjab) 地方に到達する。大王は軍をガンガ (Ganges) 流域にまで進めんとしたが，長期間にわたる遠征，インド地方の夏の厳しいモンスーンと，そのもたらす豪雨と熱病の流行で兵士は極度に疲労し，従軍を拒否するものが続出する。さすがの大王もこれらの事情からこれ以上の進撃を諦めざるを得ず帰国を命令する。そのときには全軍の兵士が大歓声をあげて喜んだという。帰路は大王の率いる軍勢が陸路を，そして彼の腹心の部下であるネアルコス (Nearchos) の率いる艦隊はアラビア海を西進しBC323年にようやくバビロン (Babyloon) に帰着する。その後，まもなく大王は熱病に罹りバビロンで客死する。しかし，この遠征はギリシアにインドをはじめ東方の多くの知識をもたらしたのである。インド側のうけた影響はこれまでの西北インドの群小国家体制が容易に大王の侵入を許したことが刺激剤となって全インドに範図を広げるマウリア王朝を成立させたと言える。インド西北部のガンダーラ (Gandhara) 地方に華と開いた仏教芸術をはじめギリシアの影響は大きいものがある。艦隊司令官のネアルコスはアラビア海沿岸地域の詳しい諸事情をギリシアにもたらし，艦隊のインダスの川下りの舵取りであったオネシクリトス (Onesikritos) もインダス川流域について記述しているが，この遠征に参加した人びとは幾多の記録を残したがこの両者はその代表である。

ローマのプリニウス (Gaius Plinius Securdus) は，その生年がAD23/24年頃といわれているがヴェスビイオ(Vesuvio)火山が大噴火を起こした79年にローマ艦隊長として火山被害者の救援に向かうと同時に，火山観測を行ったが，研究熱心のあまり彼自らが火山災害の被害者となって亡くなっている。彼は『博物誌 (Naturalis Historia)』37巻を著している。その第6巻にインドの記述があり一つの資料を提供している。

尚，著者不明でおそらくAD60～70年頃にエジプト在住のギリシア商人と考えられている人物が『エリュトゥラー海案内記 (Periplus Maris Erythraei)』を残している。この書は紀元1世紀頃，ローマ帝国では東方の奢侈品に対する需要が高まり，その貿易が最盛期を迎えた時期に成立した貿易案内書であった。そこにはインド洋各地の貿易品が詳細に記述されている。エリュトゥラー海とは狭義には紅海を指すが，ここではアラビア海，ペルシア湾，インド洋，ベンガル湾などを含む広義に捉えられている。

ローマ時代の学者たちにはあまり評価されていないようであるがこの書も貴重な資料といえる。

初めて経・緯線を用いて科学的な世界地図を描いたのがアレキサンドリア（Alexandria）の図書館長であったプトレマイオス（Claudii Ptolemaei）である。彼は100～178年頃に活躍した当時最高の地理学者であり天文学者でもあった。『地理学入門（Geographike Hyphegesis）』8巻は代表作のひとつで，その後ラテン語訳が出版されたときには『宙宇誌（Cosmographia）』と呼ばれた。そこには全27葉の地図が収録されている。このなかにはインド周辺図やセイロンのかなり詳細な地図もあってそれらの地図にはかなり詳しく地名が記載されている。しかし，この地図は当時の貧弱な知識のためか陸地の輪郭その他はかなり不正確な内容であるのはやむをえないが当時のインド地域にたいするギリシア・ローマ人の理解度を知ることができる貴重な資料であることには間違いない。

このほかにインドに関する貴重な基本資料として忘れてはならないのがフラヴィオアッリアノス（Flavius Arianus）の『アレクサンドロス東征記（Alexandri Anabasis）』全7巻とその付巻ともいえる『インド誌（Indica）』である。95年頃小アジアに生まれたアッリアノスはローマ皇帝ハドリアヌス（Hdrianus）に重用された人物であった。特に彼の『インド誌』はインド研究にとって重要な著作である。

今一つの基本文献がストラボン（Storabon）の『ギリシア・ローマ世界地誌（Geographica）』3巻である。小アジアのポントス（Pontos）に生まれBC64～AD21年頃に活躍した。地理学者であり歴史家であった彼がこれまでの多くの文献資料を集大成して著したのがこの大著である。

この他に，古くはBC400年代に活躍したヘロドトス（Herodotos）の『歴史（Historiae）』2巻などがインドに関して簡単な記述を残しており，これらも資料となる。

そこで，問題になるのはインド亜大陸の範囲である。アッリアノスによれば，「私としては以下，インドス川から東の地域をインド，と呼び，そこにすむひとびとをインド人と呼ぶことにしよう。……」[1]と記しており，このインドス川から東はガンゲス川までの間の地をインドと呼んでいるようである。プトレマイオスは「ガンジス河の内側のインドの西を限るのは，それぞれの説明済みの東側に沿って，パロパニサダイ人とアラコシアとゲドロシアである。北は，イマオン（Imaon）山脈より上のソグデア人とサカイ人に沿って，イマオン山脈によって限られる。東を限るのガンジス河。南と，そして西をも限るのは，インド海の…」[2]としており「ガンジス河の外側のインド」[3]と区別している。現在のインド亜大陸はその周辺部が含まれる。パキスタンの西部やバングラデシュの東部そしてネパールなどはこれらの資料では確認できぬため解っている範囲で多少地名を加える程度にしたい。

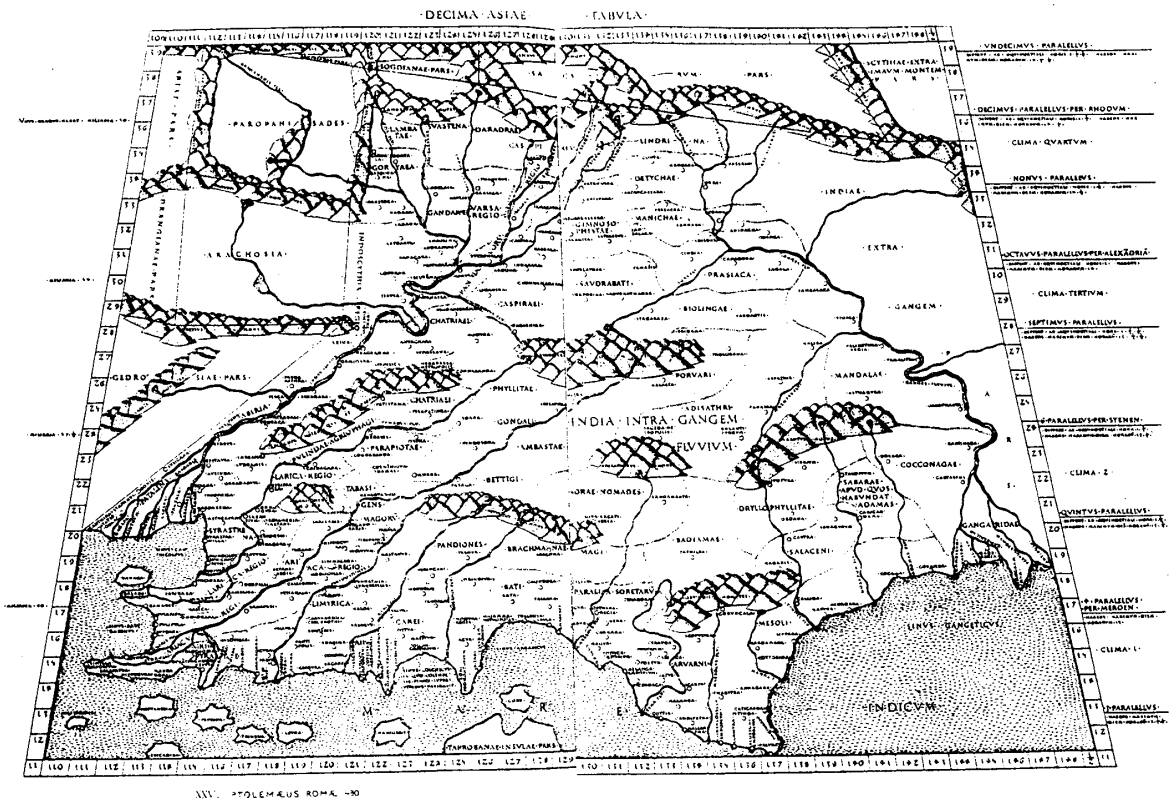
DECIMA ASIAE TABVLA
INDIA INTRA GANGEM FLVVIVM
INDICVM

図 1

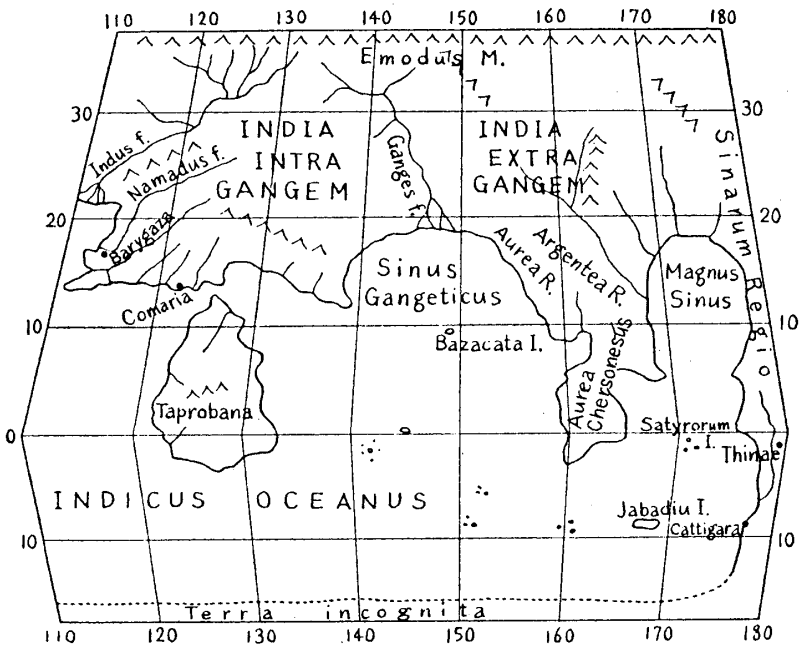
Emodus M.
INDIA INTRA GANGEM
INDIA EXTRA GANGEM
Indus f.
Namadus f.
Ganges f.
Sinarum Regio
Barygaza
Comaria
Sinus Gangeticus
Aurea R.
Argentea R.
Magnus Sinus
Bazacata I.
Aurea Chersonesus
Taprobana
Satyrorum I.
Thinae
INDICUS OCEANUS
Jabadiu I.
Cattigara
Terra incognita
110 120 130 140 150 160 170 180
30 20 10 0 10

図 2

3．インドの形状について

まず，地図にみるインドの形状であるが，その代表としてプトレマイオスの世界図があげられる（図1）（図2）。これを現在のものと比較するとインド半島部の突出がほとんど見られない。それはパリュガザ(Barygaza，現ナルマダ Narmada 川口のバルーチ Broach 市のあたり)から緯度で3度ほど南のところで，海岸線はほとんど東西方向にほぼ直線として示されており，コマリア（Comaria，現カンニャクマリ Kanniyakumari)岬へ向かって東に延びていると誤ったためにインダス河口からコモリン(Comorin，カンニャクマリ)岬までは実際には緯度で17度ほど隔たっているのにプトレマイオスでは6度ほどしかなくその結果，半島部に大きな突出が無くなっているのである。そして，コマリアのすぐ南にタプロバネ（Taprobana，現スリランカ Sri Lanka）（図3）が実際の位置より西に置かれ形状こそかなり正しいが面積が巨大な島として描かれている。それは，南北の長さが北緯12度20分から北緯2度30分まで約12度に広がっているとしたためにその面積が，実際のものと比べて14倍ほどになったのである[4]。この点に関しては『エリュトゥラー海案内記』[5]には，「バリュガサから続く海岸は北から南へ長く伸び南の地方は，ダキナバデス Dachinabades とよばれるとあ

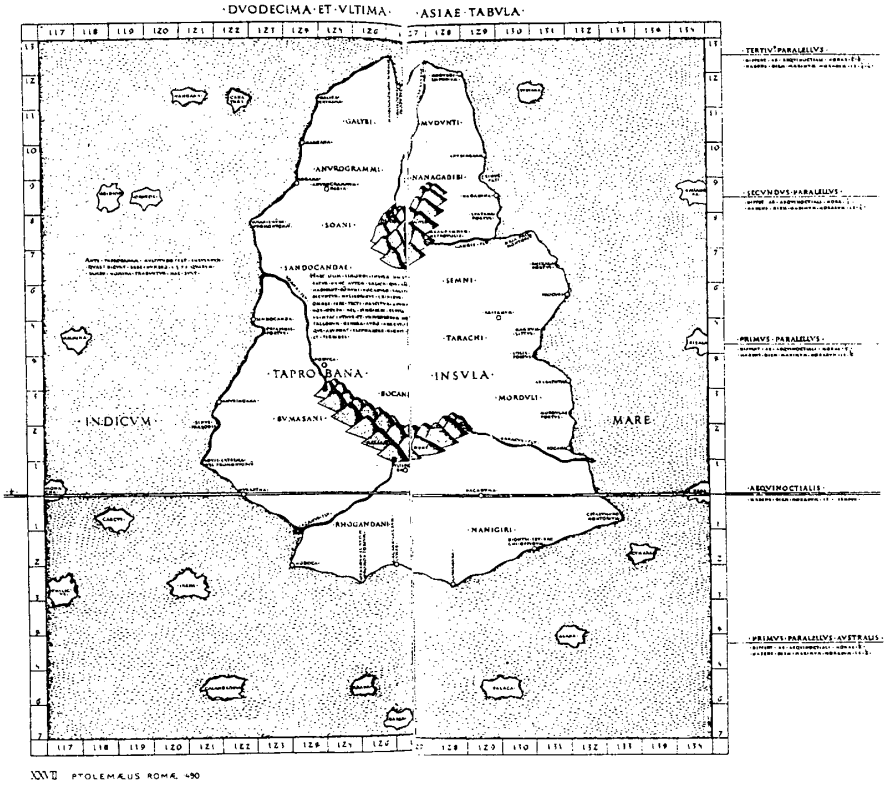

図3

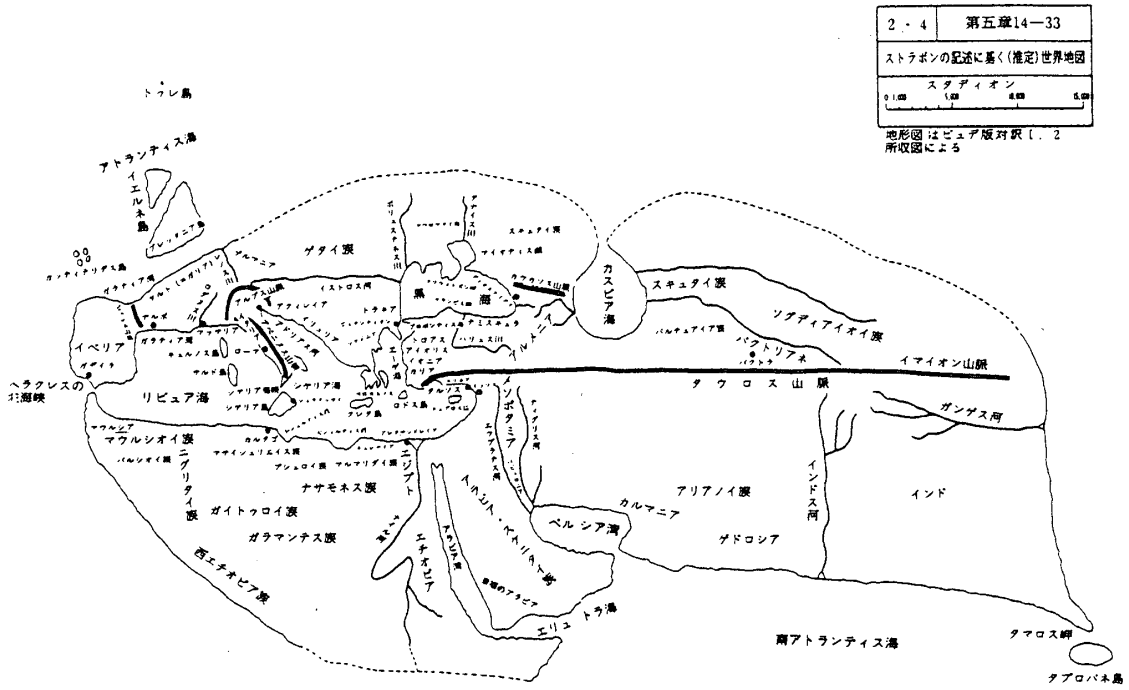

図4

るが，これはサンスクリットで南方を意味するdaksinaに由来し，現在もデカン(Deccan)としてその名が残っているようだ。インド半島が大きく南方に突出していることを認めている[6]。これに対してプトレオマイオスでは，パリュガサからコモリン岬にあたるコマリアComariaまで緯度で4度しか隔たっていないと誤り，海岸線はそれから東に転じて，インド半島の大きな突出はみられない。」[7]とあり，実際に現地を航海した商人だけあってかなり正確な知識を持っていたことがわかる。しかし，インド半島東海岸やセイロンの知識は不正確で，彼らの航海はここまで及んでいなかったようである。ストラボンは「インド地方から南へ向かってその前方に位置する外海の大きな島である。話によるとエチオピア地方の方角へ向かって（東西へ）五，〇〇〇スタディオン（九〇〇キロ）以上も伸び，島からインド地方の以上のいくつもの交易地へ象や亀の甲羅そのほかの産物も大量に輸出している。」[8]と述べている。

プトレオマイオスの地図ができる以前のものとしてはBC500年頃，地理学の祖ヘカタイオス(Hekataios)作といわれる世界地図がある。ここではインドの表現は極めて単純で実際に現地についてはほとんど知ることなく描いたものと思われる。これから多少遅れて描かれたのがヘロドトスの世界図である。彼はインドについての知識を多少はもっていたようであるが地図に示されたものはほとんどヘカタイオスのそれと変わっていない。

インドの大きさに関してはストラボンもエラトステネス（Eratosthenes）の地理書

に基づいて記述しているが，その内容をもとにして後代の人によって描かれたと思われる世界地図（図4）も残っている。彼の記述によると，「まず，北側からタウロス(Toros)山脈の先端部分がアリアネ地方から東方の海に到る間での境となり，この連山に地元では一部分づつパロパミソス(Parapamisos)，エモドン(Emodos)，イマオンそのほかいくつかの名を付けているが，マケドニア人たちは（一括して）カウカソス(Kaukasos)と命名した。また，西側からはインドス河が境を限り，南と東の側辺はどちらもそのほかの辺よりはるかに大きくアトランティス海へ突出ている。従って，この地方は菱形になっていて，長い方の二辺はそれぞれ反対側の（西および北の）辺より三，〇〇〇スタディオン（五四〇キロ）も長い。

そして，東側と南側の両沿岸に共通した岬があって，岬はどちらの側面でも等しく上記の距離だけ残りの海岸線から外へ出ている。

西側辺についてはカウカソス山脈から南方の海へ向かってその長さ約一三，〇〇〇スタディオン（二，三四〇キロ）といい，この辺はインドス河源からその河口までにあたる。従って，東側の沿岸はこの河と向合い，岬の長さ三，〇〇〇スタディオンを加算すると一六，〇〇〇スタディオン（二，九〇〇キロ）となる。」[9]「インド南端からカウカソス山脈そばのインド地方最北端までの距離はパトロクレス(Patrokres)によると一五，〇〇〇スタディオン（一，七〇〇キロ）となる。この人は地位もあり地理記述について素人ではないので，とりわけ信頼してまちがいない。」[10]と書いており，さらに「インド地方の南端地域から（北端）の山脈までの距離を三〇，〇〇〇スタディオン（五，四〇〇キロ）とすることとする。」[11]とも記している。さて，「以上がこの地方の幅のうち一番狭いところと一番広いところである。」[12]

また，「長辺は西から東へ伸び，そのうちパリボトラ(Palimbothra)まではかなり確実な距離をいうことができる。すなわち，測量網を使っての完全な測定がすんでいるからで，一〇，〇〇〇スタディオン（一，八〇〇キロ）に及ぶ王の道がある。

また，この王都より向うの地域については海からガンゲス河を経由して王都に到る遡航里程を通して推測が行われ，その距離は六，〇〇〇スタディオン（一，一〇〇キロ）といったところらしい。従って，長さの辺は全体で，一番短いところが一六，〇〇〇スタディオンとなるだろうし，エラトステネスによるとこれは一番信頼が置ける宿駅表からとった数字である。メガステネスが示す数字もこれと一致しているが，パトロクレスではこれより一，〇〇〇スタディオン（一八〇キロ）短い。

さらに，ふたたびこの距離に，岬が東向きにさらに出ている分だけの長さを加算するから，この長さ三，〇〇〇スタディオンを加えると，長辺のなかの一番長い部分になろう。この数字はインダス河口からそれに引きつづいての海岸に沿い上述の岬と岬

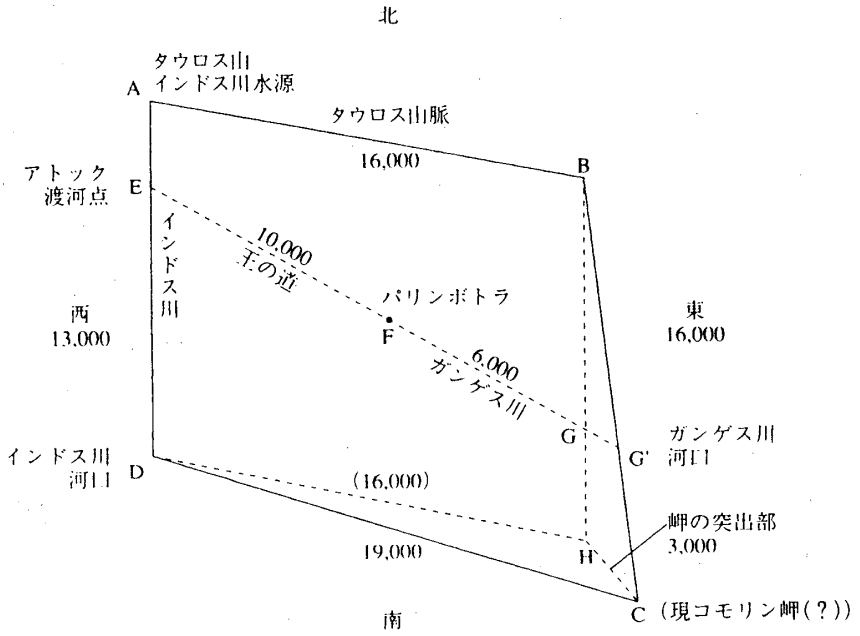

図5 ストラボン（<エラトステネス）によるインドの概形，原図はJ.W. McCrindle, *Ancient India as described in Classical Literature*, 1901 (1971), p. 17.に拠り，補筆した。アッリアノス「インド誌」注釈篇による。2150p.

の東端に到る間の距離で，岬地域には『コニアコイ族』が住む。」[13)]

なお，アッリアノスの『インド誌』の解説書に掲載された図をつぎにあげておく（図5）。それと筆者が多少不正確であるが，現在の地図から測定したデータ（ただし，それぞれの測定ポイントがはっきりしないため，あくまで推定値である）と比較するとA—D間が160キロほど現在の方が長く，C—D間とC—Bくはほぼ同じ，A—B間は50キロほど長いだけである。当時のデータが驚くほどに正確であったといえよう。

4．資料批判の態度について

次に，注目すべきは古代の人々のインド記述に示した態度である。まず，ストラボンからとりあげる。彼は「この地方について聞くばあいには思慮ぶかくなければならない。なぜなら，ここは一番遠くにあたるし，わたしたちの間でもこの地方を踏査した人は数すくないし，たとえ自分で見たとしても部分的で，大部分の事項については伝聞に頼りながら説明している。

また，見たにしてもそれらは軍隊が進軍する際の通りがかりに学んだことである。従って，この人びとはおなじ事項についてもおなじ内容を報告することはなく，それでいてこれらの事項をいかにもじゅうぶん注意をはらって検討したかのような述べ方で書物を著わしている。しかも，これらの著者のなかにはお互いおなじ遠征軍に所属

しいっしょにその地方に滞在した人びともいて，たとえばアレクサンドロスに従ってアジアを征服した著者たちがそうだが，しかし著者たちがてんでに相反したことを語っている例は珍しくはない。

従って，この地方で見たことについての話の間にこれほどの差異が起こっているとすれば，その同じ地方での伝聞に基づく話についてはどんな風に判断しなければならないか，いうまでもなかろう。

その上さらに，上記の人びとよりずっと後になって上記の諸項について一書を著わした人びとや，今日かの地方へ航海する人も数多いが，この人びとでもけっして正確な報告を行ってはいない。たとえば，アポロドロス（Apollodoros）は『パルティカ（Parchica）誌』を著わし，そのなかでセレウコス勝利王を祖とするシュリア王国の諸王からバクトリア（Bactria）地方を離反させたギリシア人にもふれているが，すくなくとも，この著者によると反乱者たちは勢力を増すとインド地方をも攻めた。しかし，著者は（予想に反し）それ以前に知られていた事項以上に何ひとつ新しいことを明らかにしていないし，おまけにこれらギリシア人がマケドニア人たち以上に広い領域にわたってインド地方を征服した，という説明は以前からの説と矛盾している。すなわち，著者によると，すくなくともエウクラティダス（Euklatidas）は一，〇〇〇の市を自分たちの支配下に置いたことになる。しかし，著者以前の史家たちによるかぎりヒュダスペス（Hydaspes），ヒュパニス（Hypasis）両川の間にいた当の部族は数は九族，その市は五，〇〇〇に及び，しかもそのなかのひとつとしてメロピスの島のコス（Cos）市より小さい市はなかった。そして，アレクサンドロスはこの地方をことごとく征服してポロス（Poros）に譲った。」[14]さらに，「今日，エジプトから船出してナイル河やアラビア湾を利用しインド地方に達する交易商人たちのうちでも，ガンゲス河まで回航してきたものはごく僅かだし，これとても一般人だからこれら地域の事情についての報告としては，まったく役にたたない。」[15]と述べているが，彼は『エリュトラー海案内記』の存在を知らなかったのかあるいは知っていても知識人でないと思われたためにその内容に信が置けなかったためであろうか。しかし，すくなくともインド半島西海岸の港市の地名はプトレマイオスの地図にあげられたものとの間に共通する点が多いことからもかなり信用できるのではなかろうか。さらに，ストラボンは「大王の遠征より前の出来ごとの伝承に注目しよう。という人があるかも知れない。しかしそうしてみても，これらの話が上記の話よりはるかに闇に包まれたものであることに気づくだろう。」[16]と彼の著述にたいする態度がいかに厳密性を重んじたかを知ることができるのである。

ストラボンは，さらに「インド地方について書物を著わした人びとは誰もがほとん

どのばあい嘘つきになってしまい，ディマコスは殊のほかひどい。メガステネスの説明はそのつぎにひどく，オネシクリトス，ネアルコスそのほかこの種の人びとになるとその説明もすでにたどたどし」[17]。と，また「デマコス，メガステネス両名は格別に信用できない，といわれてもしかたがない。

すなわち〝自分の耳のなかで休む種族〟，〝口無し種族〟，〝鼻無し種族〟，がいると報告したのはこの両名である。〝一つ目族〟，〝長脚族〟，〝指を後ろへ反らせる種族〟についてもおなじである。」[18]続いて「人間や動物については甲論乙駁のありさまで，エラトステネスもまさしくこの状態について述べている。すなわち，二人はパリボトラ市へ使者として派遣されメガステネスはサンドロコットス（チャンドラグプタ）王の許，ディマコスはこの王の息子アリトロガデス（ビンドゥサーラ，Bindusara）王の許へ赴いた。そして滞在中に書き留めた上記のような事柄を書にして残したが，いったいどんな理由があって著述の勧めを受けて書にしたのかわからない。」[19]と疑問を投げかけている。私は，彼らがこれらの話を信じて書いたのではなく面白い話として取り上げたにすぎないと思われる。

アッリアノスも「インド人のことどもについては私も，アレクサンドロスの軍に同行したひとびとやとりわけ，インド周辺の大洋を周航したネアルコスがのこした，もっとも信ずるに足る記述，さらにはメガステネスとエラトステネス，ともに著名なこの二人が記録したところをも織りこんで，別にあらためて１書を成すことになろう。」[20]と彼も記述についての資料の適，不適を判断している。以上の両者に対してプリニウスには批判的な記述態度は見られないようである。

5．地名について

つぎに取り上げたいのは，彼らの地名に関する知識である。当時と今では地名がかなり変わっている。そのうえ，先述したようにインドの範囲が不明確であり，当時の地名が今日のどこを指すのかもはっきりしないなかでの検討であるから問題も多いがおおよそのものであることを断っておく。

まず，古典に挙げられた地名をまとめた表から示す。

表1　インド地域

	プトレマイオス	ストラボン	アッリアノス	プリニウス	エリュトゥラー海案内記
山　脈	10	6	5	7	1
河　川	41	9	28	13	4
湾・海	7	1	1	0	2
島	9	1	2	2	6

半島・岬	11	0	0	2	3
都市・村	274	7	28	14	33
地　方	18	14	9	2	11
種　族	41	14	93	32	8

表2　セイロン

	プトレマイオス	ストラボン	アッリアノス	プリニウス	エリュトゥラー海案内記
山　脈	2	0	0	0	0
河　川	5	8	0	3	0
湾	2	0	0	0	0
島	19	0	0	5	3
都市・村	26	0	0	2	0

上の2表からかなり資料によって記載数に大差があることがわかる。一般的にいえば自然地名では，河川を除いて取り上げられた地名はきわめて少ない。その河川でもインダスの本・支流とガンジスではほとんどの著者が同一名を用いているが，そのほかは，呼称が異なっていることが多い。主要山脈ではアルプス・ヒマラヤ造山帯のアジア部はタウロス山脈で一括される。これは，現在はタウロス（トロス）山脈としてトルコの南部を東西に走るものにその地名が縮小されている。当時はタウロスは西からパロパミソス（ヒンズークシ）エモドン（カラコラム）イマオン（ヒマラヤ）の各山脈と呼ばれている。しかし，地名の検討は次にしたい。

〔未完〕

注

1）アッリアノス：「インド誌」，917p
2）プトレマイオス：「地理学」，120—121pp.
3）注2）：17—18pp.
4）織田武雄（1981）：「古地図の世界」，講談社，57—59pp.
5）「エリュトゥラー海案内記」：131p
6）注4）57—59pp.
7）プトレマイオス：「地理学」，付，プトレマイオス世界図の研究，織田武雄，17p
8）ストラボン：「世界地誌Ⅰ」，129—130pp.
9）ストラボン：「世界地誌Ⅱ」，383—384pp.

10) 注 8) 123p
11) 注 8) 123p
12) 注 9) 384p
13) 注 9) 384p
14) 注 9) 379p
15) 注 9) 379p
16) 注 9) 379-380pp.
17) 注 8) 126p
18) 注 8) 126p
19) 注 8) 126-127pp.
20) アッリアノス：「東征記」, 597pp.

参考文献

アッリアノス, 大牟田章訳(1996)：「アレクサンドロス東征記およびインド誌」, 東海大学古典叢書, 東海大学出版会
村川堅太郎訳 (1946)：「エリュトゥラー海案内記」, 生活社
同 (1993)： 同 中公文庫, 中央公論社
ストラボン, 飯尾都人訳 (1986)：「ギリシア・ローマ世界地誌 I . II,」竜溪書舎
プトレマイオス (1978)：「プトレマイオス世界図, ―大航海時代への序章―」, 岩波書店
プトレマイオス (1986)：「プトレマイオス地理学」, 東海大学出版会